令和４年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立千寿本町小学校
校長　　増田　好範

１　学校教育目標

○つよく　　心身ともに健康で勤労と責任を重んずる子供
○かしこく　　自主的・意欲的に学習し創造性豊かな子供
○あたたかく　　人間性豊かで人権を尊重する子供

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○児童一人一人の学力向上を実現する学校 ○当たり前のことを当たり前にできる学校 ○地域のために貢献できる学校
○児童・生徒像	○基礎・基本をしっかり身に付け　自らめあてをもって　意欲的に学習に取り組む児童 ○自分に自信をもち　情操の豊かな児童 ○心身ともに健康で　のびのびと活動する児童 ○きまりを守り　友達を大切にする児童
○教師像	○信頼し合い　認め合い　協力し合って指導に取り組む教師 ○教師力向上のために　絶え間なく努力する教師 ○児童一人一人を大切にし　確かな人権感覚を身に付けた教師 ○保護者や地域のニーズに敏感に対応し　三者連携のために努力を惜しまない教師

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

○基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上
　4 月に実施した区学力調査で、各学年の平均正答率は、区の目標値をすべての学年で上回った。通過率は、国語 91%、算数 89%で目標を上回った。しかしながら、３月の定着度確認テストでは、国語 85%、算数 79%で、算数が目標を下回った。新学年に向け、一人一人の未定着部分についてフォローする。タブレットを活用した指導の工夫を図るとともに、ノート指導の徹底を継続する。特に、自主性を育む自主学習ノートの取り組み向上について、自主的に取り組むことの意義や効果的な学習の進め方について方策を検討する。日常化してきた詩や百人一首の暗誦、芭蕉タイムでの俳句作りなどを継続し、「言葉で考える力」、「言葉で表現する力」の向上を図る。
○オリンピック・パラリンピック教育の推進
　コロナ渦で野外での活動や社会体育の制限がある中で、運動機会の確保が急務である。スポーツテストで平均値を下回った種目について、当該の力を伸ばすための手立てを講じていく必要がある。意識面で運動が嫌い・苦手とする児童を減らすための取組を推進する。体験、交流活動については、直接交流型から、動画配信型・ビデオ講演型等への変更を検討する。
○教員の授業力の向上
　主幹・主任教諭による教育技術研修会の実施と教科指導専門員の定期指導により、若手教員の基礎指導力を向上させることができた。また、研究授業では、タブレットと Zoom、Google workspace for Education　アプロケーションを活用した授業づくりに取り組むことで、ハード・ソフト両面の使用に習熟するとともに、ICT 活用授業の様々な方法について研修を深めることができた。「主体的で対話的な深い学び」や「授業における ICT の活用方策」について、さらに研修を深めるとともに、発達段階に応じた指導方法の検討・工夫・改善に一層努める。
○安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実
　研修会を通して、配慮を要する児童への各教員の対応力が向上した。また、個別支援委員会の定期的な実施により、組織的支援のあり方について検討を深めることができた。教育相談や特別支援教育に関する理解の推進に努めてきたが、今後も家庭と一層の連携を図っていくために、情報交換の場や方法をさらに工夫・改善していく必要がある。

4　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上	○	○	○	○	○
2	豊かな心・健やかな体の育成			○	○	○
3	教員の授業力の向上	○	○	○	○	○
4	安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実	○	○	○	○	○

5　令和４年度の重点目標

重点的な取組事項－１　「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上

A　今年度の成果目標	達成基準（目標通過率）	実施結果（通過率結果）	コメント・課題	達成度◎○△●
一人一人の課題を把握し、補習時間や家庭学習の充実に努め、児童の「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上を図る。	通過率　85%以上	国語　91% 算数　89%	・未定着部分については、補習時間の確保と家庭学習の充実により、理解の促進と繰り返し練習の徹底を図っていく。	○

B　目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 （誰が、何を、どのように）	達成確認方法	達成目標（＝数値） （いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度◎○△●
1 継続	朝学習 （本町タイム）	国語・算数	週２回	【指導体制】担任 【内容】・AI ドリルの活用による国語・算数の基礎的な知識・技能の習得 ・詩や百人一首の暗誦	定着度確認テスト 暗誦検定	確認テストで正答率 80%を目標とする。暗誦検定で 80%の児童が合格する。	未通過者 各クラス３～４名 暗誦検定 今月の詩・百人一首暗誦学年目標達成延べ人数割合 90%	低学年、高学年に分けて詩を示したり、学年別に百人一首を示したりすることで、暗誦への意欲が高まった。	○
2 継続	自学ノート	３年生以上（国語・算数、その他の教科）	年間	【指導体制】担任 【方法】・国語、算数のドリルやノートの他に「自学ノート」を統一し、児童が自分で課題を決めて学習に取り組む。	提出状況調査	週１回以上	提出率は、共通課題との関係で、学年・学級・時期・働きかけ方によって異なった。	優れたノートの紹介やノートコンテストの実施が成果を挙げている。意欲を高める取組を全校で共有する。	○
3 継続	読書活動	全教科	年間	【指導体制】全教職員 【内容】・年４回の読書週間、調べ学習や新聞活用の推進	学校図書館基本計画における目標	目標ごとに 80%以上	学校図書館の利用、読書冊数、スクラップやスピーチでの新聞活用については、目標達成。	調べ学習コンクールは、３年で方法を指導し、その後継続して挑戦できるようにする。	○

4 継続	言葉を磨く 芭蕉タイム	国語・学級活動	年間	【指導体制】担任 【方法】・年2回以上学級句会、毎月1句俳句の常設掲示、年2回以上コンクールへ応募	句会回数 掲示句数 応募回数	句会…2回以上 句数…12句 応募…2回以上	句会回数は、目標を十分達成できなかった。	句会の運営方法について、教員研修を実施する。	○
5 新規	パワーアップ教室	国語・算数	夏休み 期間中 学習教室・水泳教室がある日	【指導体制】校長・副校長・算数少人数・専科教諭 【方法】・少人数または個別の指導を行い、つまずきをベーシックドリル等で確認し、解けなかった問題の解き直しや補充問題を行う。AIドリルを活用して習熟を図る。	確認テスト	確認テストで区の目標値を達成する。	確認テストで区の目標値を達成することができた。	参加した児童は、真剣に学習に取り組んでいた。	○

重点的な取組事項－２	豊かな心・健やかな体の育成			
今年度の成果目標	**達成基準**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
体験活動や特別活動の工夫・改善・充実により豊かな心の育成を図るとともに、「学校2020レガシー」の推進により、体力向上にかかわる取組やSDGｓを意識した教育活動の充実を図る。	○内部評価における肯定的評価が90%を上回る。	・内部評価における肯定的評価は児童88%、保護者83%	・取り組みを継続させ、さらに運動に親しむ児童を増やすとともに、柔軟性や瞬発力などを高めるための日常的な取り組みについて検討する。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	**達成基準**	**具体的な方策**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
体育的活動等の工夫・改善に取り組み、児童一人一人が運動に意欲的に取り組むようにする。	○児童アンケート調査で、運動に意欲的に取り組むということに関し肯定的な回答が90%を上回る。	○体育朝会、体力パワーアップタイム、休み時間や放課後の遊び等の充実を図る。 ○「足立区　beyond2020 マイベストプログラム」により、目標をもった体力向上の取組に挑戦させる。	・児童アンケート肯定的評価88% ・運動月間として毎月のテーマを設定し、中休み・放課後に運動遊びに取り組ませた。 ・11月に1・2年生は校内、3年生以上は荒川河川敷でのマラソン大会を実施した。大会に向けて、意欲的に練習に取り組む姿が見られた。 ・3・4年生でフラッグフットボールの体験授業を行い、スポーツへの関心を高めた。	・「運動が嫌い、運動が不得意」という児童の割合を減らすための取組が引き続き必要である。	○

「学校 2020 レガシー」の推進により、体力向上にかかわる取り組みや SDGｓを意識した教育活動の充実を図る。	○「学校 2020 レガシー」の重点取組「難聴理解教育」「地域学習」「本町チャレンジスポーツ」について肯定的な回答が 90%を上回る。	○「学校 2020 レガシー」全体計画に基づき、指導方法・養う力を明確にした授業を実践する。 ○直接体験・交流に代わる動画配信型・ビデオ講演型等も活用して全学年で体験・交流活動を実施する。	・5 年生で難聴理解教育を実施。 ・4 年生でおみこし教室・地口行灯づくりを行い、地域への理解を深めた。 ・パラスポーツ体験は、1・2 年生ボッチャ、3・4 年生卓球バレー、5・6 年生ゴールボールを実施。 ・5 年生でオランダ連携事業によるパラ水泳アスリートとの交流授業を行い、パラスポーツへの関心を高めた。 ・全学年で国際理解教室を実施して、異文化への興味関心を高め、国際協力への理解を深めた。	・「学校 2020 レガシー」として、5 つの資質のうち、特に障がい者理解・スポーツ志向・日本人としての自覚と誇りを重点に、今後も取り組みを続けていく。	◎
食育や保健指導の充実を図る。	○各学年で、養護教諭や栄養教諭が、5 回以上健康に関する指導を行う。	○養護教諭・栄養教諭が中心になり、食育や健康教育を実施する。 ○SOS 教育やがん教育など、新たな課題に関する実践を充実させる。	・養護教諭、栄養教諭が健康診断や給食指導で直接かかわるほか、お便りの発行や掲示物の充実などで積極的な情報発信で食育指導や保健指導を行った結果、自らの健康に関心をもつ児童が増加した。	・SOS 発信の仕方やがん教育など、新たな課題についても指導を充実させていく。	○

重点的な取組事項－３	教員の授業力の向上			
Ａ　今年度の成果目標	**達成基準**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
ＯＪＴ等を活用し、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりに向けての工夫・改善に取り組む。	○内部評価における肯定的な評価が 90%を上回る。	・保護者アンケートでの十分達成・達成は 85% ・令和 3 年度 75%、令和 2 年度 74%	・前年度、不明 23%から不明 7%に改善。学校だより特別号で、教員の授業研究を特集。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み					
項目	**達成基準**	**具体的な方策**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりに向けての工夫・改善に取り組む。	○年間 10 回の OJT 研修を実施。 ○若手教員に対して、毎月教科指導専門員による授業指導を実施。	○主幹・主任教諭による教育技術研修会の実施と教科指導専門員の定期指導により、若手教員の基礎指導力を育てる。	・6 回の研修を通して、主幹教諭及び主任教諭はメンターとしての力量を高めるとともに、若手教員は必要な指導技術を身に付けることができた。 ・若手教員は、計画に基づき、教材研究を含め、教科指導員の定期的な指導を受けた。	・主体的で対話的な深い学びについて、さらに研修を深める。	○

ＩＣＴを活用した分かりやすい授業づくりについて、検討・実践する。	○週３回以上、教員がタブレットを使用 ○週３回以上、児童がタブレットを使用 ○半期に１回以上、プログラミング教育実施 ○校内研修を６回実施	○ＩＣＴ活用リーダーを中心に、ＩＣＴ支援員と連携した校内研修を実施する。 ○ＩＣＴを活用した授業の相互参観を実施する。	・教員はほぼ毎日、児童はキュビナの利用や家庭へ持ち帰っての使用で週に 3～4 回の頻度でタブレット使用。 ・プログラミング教育は、年間計画を基に実施。 ・小中連携研究では、タブレットの活用を意識した授業づくりに取り組んだ。	・学年に応じて活用できるアプリケーションを増やしていけるように、活用場面とアプリケーションの体系化を図れるようにする。	○

重点的な取組事項－４	安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実			
Ａ　今年度の成果目標	**達成基準**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
いじめ・不登校への迅速・的確な対応を進めるとともに、学習面・行動面で配慮を要する児童への対応・体制の工夫、改善を進め、個別支援教育の一層の充実を図る。	○内部評価における肯定的な評価が90%を上回る。	・保護者アンケートによる十分達成・達成は 82%	・「分からない」の回答が 11%あった。取り組みに関する積極的な発信が必要である。 ・さらに発信の機会を工夫して、より多くの家庭が教育相談や特別支援教育の体制や具体的な取り組みについて知ることができるようにしていく。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	**達成基準**	**具体的な方策**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
いじめの根絶と不登校の早期解消に努める。	○学年末の段階でいじめ・不登校の解消率を100%にする。 ○内部評価における教育相談の肯定的な評価が 90%を上回る。	○年 3 回のアンケート調査と迅速かつ丁寧な聞き取り・継続指導の実施。 ○ハイパーQU の有効活用。 ○担任とコーディネーター、特別支援教育コーディネーター、カウンセラー、SSW の連携による不登校支援。	・保護者アンケートで関連項目「問題や悩み、トラブルを見逃さずに対応」の十分達成・達成が 76%、不明が 15 パーセントである。肯定的評価が、令和３年度に比べ 10%下降している。	・教員一人一人のカウンセリングマインド、児童理解・教育相談に関する力量を高めるための取組を一層推進する。	△

学習面・行動面で配慮を要する児童への対応・体制を工夫・改善・充実させるとともに、研修を通して教員の指導力を高める。	○配慮を要する児童への対応についての研修会を年間３回実施する。	○配慮を要する児童のニーズや一人一人を伸ばす指導について研修を行い、共通認識のもと、組織的な指導が進められるようにする。 ○個別の支援に当たっては、通級指導学級教員との連携により、効果的な指導方法と個別の指導機会の充実を図る。	・学校生活支援シートの見直しと配慮を要する児童への対応についての研修は、予定通り実施することができ、対応の改善が図られた。	・関連機関との連携も積極的に行うことができた。今後も、継続して連携していきたい。	○
個別に支援が必要な児童に対して、全教員の共通理解のもと効果的な指導が展開できるようにする。	○個別支援にかかわる情報交換を月１回以上実施する。	○担当教員・専門員・コーディネーター・カウンセラーの密接な連携により、効果的な指導方法と個別の指導機会の充実を図る。	・個別支援委員会を定期的に開催することで情報交換が図られ、保護者との連携、児童の学習や生活に変化が見られた。	・引き続き情報交換を密にし、学級教室でもニーズにあった効果的な指導ができるようにする。	○

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

重点的な取組事項－１　「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上

○区学力調査での通過率は、国語 91%、算数 89%で目標を上回った。2 月の定着度確認テストでは、国語 84%、算数 79%で昨年度 2 月と同様の傾向であり、この段階では、まだ目標値には至っていない。新学年に向け、一人一人の未定着部分についてフォローする。

○ノート指導の徹底を図ることで、思考力・表現力の向上に繋げることができた。「話して書いて伝え合う授業」を目指しているが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、ペア・グループなど多様な話し合いの機会は十分に確保することができなかった。

○タブレットの導入により、アプリの活用で意欲的にグループでの検討に参加する姿が見られた。また、キュビナの活用により、基本的事項の定着に取り組ませることができた。

◆「言葉で考える力」、「言葉で表現する力」の向上のために、語彙の拡張を図るための指導方法の開発や家庭学習の見直しを図っていく。また、ICT の活用について一層の工夫を図る。

重点的な取組事項－２　豊かな心・健やかな体の育成

○「学校 2020 レガシー」にかかわる、地域学習や環境学習は、予定通りに行うことができた。

○これまでアワード校として推進してきた「パラスポーツ体験による障がい者理解」は、スポーツ推進委員の協力により、1・2 年生ボッチャ、3・4 年生卓球バレー、5・6 年生ゴールボールを実施することができた。

○毎月の運動月間としてテーマを設定し、休み時間や本町タイムにおける体育的活動、校内マラソン大会なども取り入れて運動の機会を増やした。

○9 月に全学年で 3 年ぶりに国際理解教室を実施し、異文化への興味関心を高め、国際協力への理解を深めることができた。

○各学年において食育・保健指導を実施し、児童の健康に関する意識が高まった。

◆コロナ渦で野外での活動や社会体育の制限がある中で、運動機会の確保が急務である。スポーツテストで平均値を下回った種目について、当該の力を伸ばすための手立てを講じていく必要がある。意識面で運動が嫌い・苦手とする児童を減らすための取組を推進する。

重点的な取組事項－３　教員の授業力の向上
○主幹・主任教諭による教育技術研修会の実施と教科専門指導員の定期指導により、若手教員の基礎指導力を向上させることができた。
○小中連携研究では、タブレットを活用した授業づくりに取り組むことで、タブレットやアプリケーションの使用に習熟するとともに、ICT 活用授業の様々な方法について研修を深めることができた。
○基礎体力を高めるための指導について講師を招へいした授業研究を行い、楽しみながら体力を向上させる場づくりや運動内容について検討した。
◆「主体的で対話的な深い学び」や「授業における ICT の活用方策」について、さらに研修を深めるとともに、発達段階に応じた指導方法の検討・工夫・改善に一層努める。

重点的な取組事項－４　安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実
○教育相談コーディネーターと特別支援教育コーディネーターを中心に、スクールカウンセラーや特別支援教室アドバイザー、スクールソーシャルワーカーの助言を受け、全校体制での取組が充実してきている。
○年３回の研修会を通して、配慮を要する児童への各教員の対応力が向上した。また、個別支援委員会の定期的な実施により、組織的支援のあり方について検討を深めることができた。
◆教育相談や特別支援教育に関する理解の推進に努めてきたが、今後も家庭と一層の連携を図っていくために、情報交換の場や方法をさらに工夫・改善していく必要がある。

（２）保護者や地域へのメッセージ

コロナ禍に入り、３年が経ちました。社会の様々な動きも「3 年ぶりの～」と言われるように、この間の対応を参考にして実施方法を工夫し、基本的な感染症対策を講じながら、従前の学校行事をできるだけ実施できるように努めてきた１年でした。

お陰様で、運動会、本町フェスティバル、水泳教室、遠足、社会科見学、自然教室（宿泊）、学芸会、マラソン大会など、それぞれに自分のめあてをもって意欲的に取り組むとともに、友達と、地域の方々と、さらに校外の様々な人々や自然とかかわる中で、児童一人一人がひとつの目標を成し遂げた満足感をもち成長することができました。

まだ事態が完全に収束する状況ではありませんが、子供たちの更なる成長に向けて、ご家庭の協力と地域の皆様のご支援を引き続きお願いいたします。

（３）その他（学校教育活動全般について）

新しい学校の生活様式のもと、本校の教育目標「つよく　かしこく　あたたかく」を目指して、児童は日々の学習の積み重ねと４つの「あ」あいさつ、あつまり、あとかたづけ、あたたかいことばに加えて、２つの「あ」安心、安全を心がける生活に取り組み、それぞれに成果を挙げることができました。今後も、児童の意欲をさらに高めて力を伸ばしていけるように、また、一人一人のよさに着目して自信をもって取り組めるための励ましができるよう、これまで以上に教職員が自己研鑽に励み、教師としての力を伸ばしていけるよう努めてまいります。